中世集落の広場

渡 辺 達 三

The Square in the Medieval Settlements

By Satomi WATANABE

1. 序

この小論の課題は、中世の集落と広場の全般について包括的にみることを意図したものではなく、時間的にも空間的にも多様性のある中世の集落のうち、空間的にあるいは社会・経済的に広場の成立基盤として一定の根拠を有し、しかも興味あると考えられるそれらのいくつかについて集落と広場の関係について考察することにある。なお本稿のなるにあたつて明治大学教授萩原龍夫、東京大学史料編纂所助教授金井円、伊藤鄭爾の各先生の御教示をえた。さらに萩原教授にはその著書「中世祭祀組織の研究」に教えられるところが大きかった。厚く謝意を申し述べる次第である。

2. 一乗院領池田荘

大和の池田荘、乙木荘、若槻荘、小東荘などの畿内中心部のいわゆる一円集村型均等名の荘園においては、荘園と緊密に結びついた、そこに居住する農民たちの生産・生活の必要性に基づき形成される、村落結合をみることができ、その結合の核としての社寺を推定することができる。

大和国池田荘は延久期には2条3・4里、3条3・4里の四ヶ里にまたがり散村的であり、また各坪には公領その他の相坪があり一円的でなかったが、文治期においてはほとんど2条4里に集中し、他領を交えない一円的形態に転化しているのがみられる（図一1）。

このような変化は荘園領主の農民支配実現上の、および農民の村落生活実現上の矛盾の招来に起因すると考えられる。渡辺は池田荘が律令時代の里の発展したものであること、そしてそれは平安末期頃には鎮守の祭祀や水の分配等を中心として相当に鞏固な族縁ないし村落共同体の結合の形成を推定している。²⁾

池田荘の文治2年の村落は図にみられるごとく、1坪にある則元名、重遠名を除く他の11名の1反の屋敷地が相互に隣り合う14、15、22、23、26-27、27、28の各坪に集中し集村形態を示している。そしてこの村落の政治的・経済的中心では22坪に倉庫があり、23坪に下司屋敷があることから、22-23坪一带であると考えられるが、そこに村落生活の精神的核である堂があることは、その

堂の特別な意義を知りうる。一般に古代以前においては神社の設置の場所は、現実の社会生活上の便利よりもその宗教的意義が重視され、その多くが山上、山際等の集落のはずれに設けられ、中世以降、集落の結合の核として成立した小社寺は集落の社会生活上の重要な位置に設けられる傾向がある。集落の重要位置にある社寺の例は、池田荘と同様の一円集村型の均等名の興福寺領田村荘、大乘寺領若槻荘等にみられ、池田荘の堂の位置がたんなる偶然でないことを推定しうるが、もしそうであるとすれば、この堂は村落の公共的・社会的生活の単なる精神的核の機能にとどまらず、たとえば集会・慰楽の場として現実の社会生活のうえで重要な意義をもつ広場としての性格を一定程度有する空間であつたであろう。当荘は文治以後いつそうの集村化を遂げたほかはその集落形態はほとんど変化することなく近世郷村のそれに転化しその形態を保ちつづけ今日に至つているといわれているが³⁾ 堂敷地は現在においても同一坪に熊野神社として存続し、しかもそれと併存する神仏習合時代の寺庵が今日では集会所となつていることはさきの推定の内容の時代的存続とその妥当性を傍証するものであろう。⁴⁾

1) 渡辺澄夫「畿内荘園の基礎構造」1956吉川弘文館原図

2)、3) 渡辺澄夫前掲書

4) 本項は渡辺澄夫同書に負うところ大きい

3. 稗田

集落全体が濠で囲繞されている環濠垣内集落には、大和の膳夫、稗田、岡崎、保津、山城の佐山等の例がある。稗田はこれらのうち最も典型的な環濠集落とされている。環濠集落形態は中世末期における惣村的結合に対応するものであり、村落自治の急速な成長とそれにとまなう界論、水論の統発等による対領主・他領関係の自衛の必要がこのような集落形態をとらせたのであろう。環濠集落の大きなものとしては城下町、堺等の港湾自由都市、寺内町等をみることができるが、大和平野に中心にみられる環濠垣内集落は、その集落規模が今日の字程度の大きさであり、そのなかにおいては、集落民の日常的なface to faceの接触が保障されるのであり、集落の広場の観点のうえできわめて興味ある。

30	{有友名(助貞).140 貞垣名 .40
----	-------------------------

1	{貞垣名 2.000 〃 (1.000) 助方名 2.000 則元名 1.240 〃 (.120)▲ 國則名 .300 〃 (1.60) 重遠名 .240 〃 (.120)▲	12	{貞垣名 2.000 安近名 2.000 重方名 1.000 國末名 5.000	13	{有友名(助貞)2.180 國末名 3.000 末貞名 4.180	24	{重方名 10.000	25	{有友名 {助貞.210 重遠1.30 貞垣名 2.120 重遠名 6.000	36	畑
2	{有友名 {助貞2.000 重遠2.000 則元名 3.000 末貞名 3.000	11	{末貞名 8.000 房官田 2.000	14	{則元名 3.000 安近名 4.000 重方名 (1.000) 國末名 1.000 〃 (1.)▲	23	{助方名 .180 〃 (1.)▲ 國末名 5.000 末貞名 1.000 〃 (1.)▲ 倉敷地 1.180△	26	{助方名 .240 則元名 2.120 重遠名 5.180 〃 (.180)▲	35	
3	{國則名 3.000 則行名 2.000 末貞名 5.000	10	{助方名 3.000 則元名 1.000 則行名 4.000 安近名 1.000 重方名 1.000	15	{助方名 3.000 重方名 6.000 〃 (1.)▲	22	{國則名 1.000 〃 (1.)▲ 重遠名 2.180 則行名 .180 〃 (1.)▲ 安近名 2.000 〃 (1.)▲ 倉敷地 1.△	27	{重遠名 (.60) 〃 2.180 助貞2.60 〃 (.180)▲ 重遠1.240 〃 (1.)▲ 則元名 1.120 〃 (.240)▲	34	井
4	{貞垣名 6.180 〃 (1.180) 助方名 2.000	9	房官田 3.000 預所給 4.000 小童給 3.000	16	{助方名 1.000 末貞名 3.000 房官田 1.000 人 給 5.000	21	{有友名(重遠)1.000 國則名 2.000 重遠名 5.000 房官田 1.000 人 給 1.000	28	{有友名 {助貞1.000 重遠1.000 貞垣名 5.120 〃 (1.)▲ 房官田 2.000	33	池
5	{有友名(重遠)3.000 助方名 2.000 則行名 3.000 預所給 2.000	8	{國則名 10.000	17	{安近名 10.000	20	{助方名 5.000 國則名 1.000 則行名 3.000 預所給 1.000	29	{國末名 6.000 預所給 2.000 小童給 2.000	32	房官田 2.000
6	{則元名 4.000 則行名 1.000 人 給 2.000 上番法師給 3.000	7	常楽会仏供免 10.000	18	預所給(畑) 10.000	19	{則行名 3.000 預所給 7.000	30	{有友名 {助貞1.180 重遠1.180 則元名 3.000 末貞名 4.000	31	{則行名 4.000 御 佃 6.000

註 {内は名、数字は面積を示す。()内は畝、▲はその畝が名屋敷たる事を表わす。△は鎮守及び庄倉である。各名すべて1反となるが、屋敷が1ヶ所がない時は、1反以下に細分されている。但し27坪有友名の重遠の畝1反は、180歩が屋敷である事は、助貞が他の180歩の屋敷を有している事から考えられ、従って残り180歩は屋敷ではない。

図一 1 文治2年池田荘条里坪付図①

このような集落にはそのうちに広場をもつものもあるが、神社の境内地のある場合も多い。神社は集落の結合の精神的な核であり、その境内地は変事のある場合には最終の砦として機能すべく意図され、集落の重要な位置をしめている場合が多い。柏木では、集落外に神社があるが、集落の環濠がその神社まで延長されている。神社の位置が集落のなかで一段と高いところに位置し、その

神社をさらに濠が囲む場合もある。稗田では神社の前の濠がとくに拡大され、さらに神社の西側に支濠が設けられ、神社を保護している。この神社の境内地は平時にあつては集落民の日常的な集会場の広場としての性格を有する空間であつたと考えることができる。

1) 堀井甚一郎「奈良県地誌」大和史蹟研究会1962より転載

図一 稗田古図¹⁾

図一 貝塚古図²⁾

4. 貝塚寺内町

戦国安土・桃山期以後、一向宗徒により建設された寺内町には吉崎、山科、石山、井波、城端、富田林、久宝寺、八尾寺内、今井、貝塚等があり、その多くが環濠、土居等に圍繞された防禦的な性格を強くもつ集落であつた。その多くは、格子状の区割をもち、御坊を中心に他屋、町人町などよりなつていた。蓮如は吉崎の集落の形成、景観をつぎのように述べている。

○前略 細呂木の郷の内吉崎とやらんいひてひとつのそびゑたる山あり。その頂上をひきくずして屋敷となして一閣を建立すときこへしがいくほどなくしてうちつづき加賀・越中・越前の三ヶ国のうちのかの門徒の面々よりあひて他屋と号していらかをならべ家をづくりしほどにいまはや一二百間のむねかずもありぬらんとぞおぼへけり。あるひは馬場大路をとほして南大門・北大門とてそのなあり。さればこの両三ヶ国のうちにをいておそらくはかかる要害もよくおもしろき在所よあらじとぞおぼへはんべり。¹⁾

寺内町の御坊は空間的にも機能的にも集落の中核でありそれは、一向宗という強烈な宗教性に媒介された宗徒の集会合する、特殊な広場的機能をも有する空間であつたであろうと考えられる。

寺内町成立以前の貝塚は根来寺の支配下にあり、彼らは草庵の道場を中心として一向宗の念仏の行法を行ないつつ自治的な結合をなしていた。また、草庵のみでなく神社の座、寺院の講、隣組の組織としての番・垣内等の種々の自治的な結合組織を有し、社会的な連帯意識を醸成しつつあつた。たんに門徒として念仏聴聞をなすだけでなく、それを媒介としながら集落自衛その他のための政治的・社会的な諸活動を行なつていたのである。

天文14年、京都の落人右京坊を草庵に根来寺より迎えて住持とし、同24年3月には大坂石山本願寺下の貝塚御坊の寺内として取建てられた。寺内の中心的な核はいまでもなく御坊(願泉寺)であり、それは、集落民の強い自治的結合を背景として、寺内全体の精神的な核、および行法の集会の場としての機能を有する広場としての性格をもつていた。

しかし、それも長くはなかつた。御坊の住持の領主的権威の増大はおさえるすべもなく、封建領主化の道を歩みつつあつたのである。こうして、2代住持ト半の頃より、住民と住持との間には争論その他の緊張関係が生ずるにいたる。この段階においては、御坊は城下町の城のような住民を疎外する空間に変質していつたであろう。³⁾

- 1)「帖外御文」文明5年8月2日附
- 2)牧野信之助「土地及び聚落史上の諸問題」河出書房1938原図
- 3)本項は臨時貝塚市史編纂部「貝塚市史」1958、第1、3巻に負うところ大きい。

5. 近江国得珍保今堀

南北朝・室町期には、土豪の名主層の荘域をこえる国・一揆・党などの諸結合の下に、生産力の増大と相互規定的な直接生産者層の地位の安定とその自立性の上向的發展を主なる契機とする、彼ら自身の生活・生産を実現するための地縁的村落が惣の形態をとつて明白にくる。この惣のうち、近江の菅浦、今堀は最も先進的な一つの典型を示している。

今堀では南北朝頃より十禅師権現社(日吉神社の摂社であり明治以降日吉神社と改称された)を中心とする宮座があり、その宮座の神事を媒介とする村落結合がなさ

れていた。

得珍保一帯には早くから商業活動がみられたが、領主延暦寺はその商業活動からあがる多額の公事銭をとりたてるために種々の保護を加え、この保護は一帯の農民の地位の向上、自治的活動の展開に一つの契機を与えた。永和4年の図師下和状¹⁾では当時名の収取下にあつた百姓らが「領」を介して、新墾耕地の年貢の減免等について難願しその主張を通してののがみられる。

今堀では、はじめから土豪が存在していなかつたかあるいはその早期上昇離村のため、早くから土豪的核を欠き、²⁾村民は相互に散りがかりの土地の占有関係にあつたこと、商業活動による補完を通しての農民としての地位の向上、自立化過程等があり、対領主・他領、村落内における共通の利害関係の大きさに比し、村民の間の利害の対立・矛盾は比較的小さく村民の自治的結合関係の醸成されやすい基盤を有していたと考えられる。土豪的・特権的な上層名主ではなく一般村人で散りがかりの占有関係にある藤次の高い村人が惣の執行機関である年老に村人の衆議により選出され、神事その他村の種々の行政の執行、涉外、惣有財産の管理などの村落生活全般にわたる重要事について指導し支配していた。

永徳3年正月の結鎮頭に「右於新座輩、雖為一度選出仕之者、依其座次第可來頭指之者也、仍衆議之評定如斯」³⁾とあつて座への新加入者は席次の順に従い頭を差さるべきことを座衆の衆議により決定したことをみることができる。つぎに入座の資格として、

注進サクシノ事、コトコトクサクシヲ出ササラム人ラ者、サエハ入申ヘカラス ○中略 チケノ中人、マウトノ人ラニイテハ、ミツアユニテアリトモ、シモニツクヘシ、

一サクシータ今ニ出サラム人ラハサニ入ヘカラス

仍為後日沙汰状如件

応永十年ひつしのとし 二月 日⁴⁾

とあり、地下の中人、間人等の下層農民も末席ながら着座を認められていることがわかり、座の次第に解放されつつある姿を知ることができる。

そして、そのような座を中核としながら、惣の重要事が村民全員の集まる野寄合において審議・決定されたのであろう。それゆえ寄合は

奇合等江二度仁不出人者五文可為咎有也⁵⁾

と重視されたのである。その場所は堂宮の前の境内地である場合が多かつたであろう。今堀の現存の最初の惣掟である応永32年のそれには堂宮の境内地の利用のされ方について興味ある事例を提供している。

今堀郷座主衆議定条々事

一、堂拝殿蓐私不可立

一、太鼓私不可打

一、堂宮前私物早勝灰不可行

一、打板私敷不可置

右於比旨違背輩者可三百文咎猶以任我意人者末代可被停止座主者也仍所定如件

応永三十三年十一月 日⁶⁾

第1項では堂拝殿の前に勝手に蓐を立ててはならないこと、第2項では太鼓を勝手に打つてはならないこと、第3項では堂宮前で私物を干したり商売を行なつてはならないこと、第4項では、地面に打板を勝手に敷いて置いてはならないこと、以上のことに違反すると300文の罰金、さらに我意を通した場合には座衆の資格を永遠に停止するという掟の内容である。ここに堂宮前が村民の日常生活に密着した広場としての性格を強くもつ空間であることをみることができる。とくに興味あるのは第4項である。神社は寺院に比し、空間的に多人数の集会には適さないが、堂の場合にも、一定以上は限界があつたのであろう。座が次第に解放的になり、そのなかに隷属的農民までもを含みこむにつれ、その能力の限界を示したのである。堂宮拝殿などに入れない人々が自らの座席としてあらかじめ確保するために境内地の地面の上に打板を敷き置くことがあつたのである。このことは、さらに、このような多人数の集会合する集会がある程度頻繁に開かれたことを推定させる。そうでないならば、人々は打板を敷くという努力をしないで直接地面の上に座したであろうし、打板を相当な期間放置しておくこともできないであろうから。こうして、社寺の境内地が、村民の日常生活に密着した、しかも公共生活を行なう核としての、たんに精神的な結合の中核というだけではなく現実の社会生活の上で重要な意義をもつ空間になつていたことを推測しうる。さらに永正17年の惣掟には、

定条々掟之事

一、於諸堂宮庵室バクテ諸勝負堅禁制也

○中略

右依衆議定所如件

永正17辰庚年十二月廿六日⁷⁾

とあり、社寺ないしはその境内地が博奕・諸勝負事を行なわれるレクリエーションの場としての機能をもつ空間になつていたことを知りうる。これは少なくとも社寺が神聖にして不可侵の空間から、より宗教的な尊厳さを喪失し、人々の日常的な生活に密着し、親しまれる空間に変質していったことを推測させる。

しかし、このような社寺境内地が典型的な近世村落のそれにみられるように村民全員に平等な関係で解放されるものでないことはいうまでもない。すでにふれたように今堀においても中人・間人とよばれる隷属的小農民が存在し、彼らは入座を認められるにしても末席に甘んじなければならぬばかりか、つぎのように同罪に対して

同罰でない扱いを受けなければならなかつた。

一惣森ニテ青木ハ葉かきたる物ハ、村人ハ村を可落、
村人ニテ無物ハ地下ヲハラウヘシ⁸⁾

このような差別は村落生活の全般においてみられたであろうし、社寺の利用においても、現実的な、あるいは心理的な種々の制約があつたと考えられる。宮座の構成員のフラットな姿—それは同時に社寺境内地の利用のフラットな姿を示すものであるが—は近世初頭の小農の階級闘争を通じてはじめて現実のものとなるのである。しかし、隷属的小農民も次第に経済的・社会的地位を向上しつつあつたのであろう、最も保守的な性格をもつ座への着座を認めさせるにいたつていのである。⁹⁾

1)、3)、4)、6)、7) 今堀日吉神社文書

2) 宮川満「太閤検地論」Ⅱ、お茶の水書房 1959.

5) 今堀日吉神社文書 文安五年地下掟

8) 今堀日吉神社文書 延徳元年地下掟

9) 本項は萩原龍夫「中世祭祀組織の研究」に多くを負つている。

6. 堺

惣村に対応する惣町結合ともいふべき都市の地域的結合も、市場・港湾・宿駅・門前等の諸都市においてみることができる。自由都市といわれる都市の惣町結合においても、家父長的農奴支配者としての特権的門閥町人の下には、多数の、自立を遂げえない隷属的小町民の存在がみられ、前者と後者が一つの町民として領主に対するということはなかつた。しかし、それにもかかわらず、先進地帯においては、隷属的小町民の経済的地位の向上と自立化の進展にうらづけられて、ある程度自由にして自治的な都市の建設の意欲のみられる例もあつた。

16世紀の堺は、そのような都市の一つの典型的な存在であつた。そして、それは群雄割拠時代の戦国時代においてその開花された姿をみることができる。堺は商業活動の舞台を国内市場から海外市場にまで伸ばし、対明貿易等において莫大な富を蓄積することができたが、このことは、直接的・間接的に、零細町民の経済的自立化を促し、またそれが戦国大名の格好の軍用金の徴収源となり、彼らのその否定を恐れることによる、堺の平和が保障された。こうして堺では、平和があり、町民の商業活動が積極的に保護され、商業取引の市町、遊樂のための湯屋町、宗教上の社寺を中心とする町人中心の町として育つていった。

堺南荘は応永期頃より地下請が認められ、文明年間には会合衆の存在が文献にみえるようになり、次第に自治的な発展をしている様子を知ることができる。文明18年の記録に「印首座今北庄経堂にあり、経堂は地下之公界厥¹⁾」とあり、会合衆の集会の存在、およびその集会所

が北庄の経堂であることを推測させる。大永年間にはつぎのような掟の存在が南北荘ともにみられる。

定 堺南荘

一、地下宿被免許事

一、喧嘩被停止訖若不慮仁出来之時者父子并親類近付等雖覃殺害刀傷便宜之輩則罷出相互押分可致注進万一於令合刀族者不及理非可有仰成敗之条縦雖有宿意不可單鉾榊事

一、不可諸商売押買事

一、於盗人者雖為三錢可被誅事

一、不可濫妨狼籍事付博奕停止事

右条々被定置訖若於違犯之輩者可被処嚴科者也、仍下知如件

大永七年三月廿三日

筑前守

可竹軒²⁾

また社寺はつぎのように武人の侵入から保護された。

禁制

泉州堺南庄顕本寺

一、軍勢甲乙人等乱入狼籍之事

一、於寺家寄宿事

一、於寺内代取竹木事^{但除寺家用}

右条々堅令停止訖若有違犯之輩者可被処嚴科者也、仍下知如件

寛正五年三月十六日 刑部少輔源朝臣(花押)³⁾

自治の全般的な気運の盛りあがりのうえに市民の集会レクリエーションの場としての広場は重要な意義をもつていたと考えられる。時代は多少降るが慶長元年のルイス・フロイスの都発の書翰に道路の広場にふれた記述がある。

十月二十日使者は大阪より九里にみない堺を出発した。道の広場には堺の市及び他の地方より来た婦人達が浅敷のようなものを仕つらえて使者の一行の通過を見物した。これは日本人が生来大変好奇心に富んでいるからである。⁴⁾

当時の絵図、地検帳その他の堺の町の空間的な様子を知る資料がないので推測しうろのみであるが、この広場はあるいはそれほどの面積を有するものでも、広場としての形態をもつものでもなく、道の偶然的に広がった部分にすぎない可能性もある。しかし、周知のごとく堺の市街は当時においてもきわめて稠密であり空地がほとんどみられなかつたにもかかわらずこのような広場が存在したという意義は大きい。さらに、広場に見なれていたのであろう外人にそれを広場と言わせたことは、その形態如何によらず、十分に広場としての機能を有していたことを知りうる。

このような道路の広場を生んだ堺では、当然のことながら、奈良薬師堂郷の薬師堂のような、広場的な機能をもつ社寺境内地の存在をみることができる。さきにあげ

た会合衆の集会所となっていた北荘の経堂もその例であるが、さらに、馬借・大工等の職業的集団による集会所・レクリエーションの場となっている社寺をあげることができる。

甲明神附馬堂

○前略 又或人ノ云ク馬堂業師ト云ルハ誠ニ靈驗新ニ御坐故ニ諸民参詣人或時南北ノ馬借此堂ニ集リ後後ハ寄所ト成故ニ馬堂業師ト名付タリ所ハ今ノ難横小路町ノ中ニ在⁵⁾

これは馬堂の由来を述べたものであり、一つの見解を示したものにすぎず、その真偽のほどはわからないが、次の史料とともに、そのような職人集団の集会所が小社寺において保障され実現されていた様子を知ることができる。

荒 神 堂

古昔摂州清澄寺ヨリ勧請申石体ノ荒神也御長三尺幅二尺厚八寸有此石ニ文字彫付有シトカヤ一乱後ニ今ノ弁財天ノ社ノ前ノ池中ヨリ堀出シ宮内ニ納即三村六明神ノ末社也然ト云共池長三宅両氏ヨリ三村寺僧へ訴へ南荘大工中間へ恩借ス文明十六年甲辰十一月廿九日別所ニ移奉ル南荘樽屋町ニ勧請申シ大工中ノ寄所トス今ニ至テ毎年十一月ノ火焼祭右ノ故有ヲ以テ三村宮寺僧参勤ス⁶⁾

堺を代表する会合衆は特権的門閥商人であり、そのような人々の集会所は、堺以外の諸都市においてもみることができるが、このような馬借・大工仲間などの都市の比較的下層に属する人々の職業的組織の集会所の存在がみられるところに自治都市堺の面目をみることができる。すなわち、これは堺の自治が一部特権的上層民だけの間にみられるのではなく都市の下層民の間にも浸透していること、そして、下層民は、他の都市にありがちな、上層町人の空間に恩恵的に参加を許されるのに甘んずるのではなく、彼ら自身の空間を独自に所有し、職業仲間としての連帯感を醸成していつたのであり、堺の自治の基盤の強さを知ることができるのである。

さて、社寺の境内地は町民各層の公共的生活の中心であるとともに私的生活のうへのレクリエーション・宗教・娯楽の中心ともなっている。つぎの史料は旭蓮社にある塩風呂の由緒を述べたものである。

元禄二年三月十六日ニ惣代半左衛門より

御伺候故書付遣之

一、泉南之塩風呂者行基菩薩海辺ニ井ヲ堀 此井中 石像之業師仏を安置ス奇成哉海辺たりといへとも其如来之胸中より清水湧水ス此水を風呂に用入湯ス諸人之衆病悉除文亀二年壬戌正月三日曉天に屋敷主八万貫屋妙徳に毘沙門天告たまふと寺物ニ致さずば此井水退転せんと新に霊夢を蒙リ依之旭蓮社へ寄進シ寺内に

に宝塔を建立シ弘法大師一刀三礼之毘沙門天王を安置ス都鄙之尊卑昼夜市を成事日々盛也天正年中ニ豊朝臣太閤秀吉公有馬湯治之後此風呂へ入湯有て不日持病平癒ス其靈験を感じ諸免除之御朱印を賜時之刺吏石田隠岐守殿ニ被仰付定条目を天正十六年戊寅十二月二十日ニ下賜其条目今ニ旭蓮社在之候以上

一、塩風呂屋敷表拾貳間三尺五寸

此内表八間

口者裏入拾五間

残四間三尺五寸八裏入六間 旭蓮社

石田隠岐守定書本紙天正十六年也(貼紙)⁷⁾

ここで塩風呂の屋敷主八万貫屋妙徳が「寺物に致さずば此用水退転せんと新に霊夢を蒙リ依之旭蓮社へ寄進シ」という記述は、堺の自治制と相互規定的な関係にある公共生活の意識の進展という点で興味深い。公共生活の発展は一町民の屋敷主に、薬用風呂の私有をいましめ公共の用に供すべく旭蓮社に寄進すべきであるという考えを抱かせるにいたつたのである。

ここに、堺の、庶民にまでひろがる自治生活・公共生活の根強い基盤をうかがい知ることができるが、このような基盤のうえに、広場の成立があるのであり、他の都市にあまり類例のない社寺境内地の広場的な機能の強さを推定できると考えられる。

1) 蕉軒日録 文明18年2月12日

2) 古文書集一

3) 顕本寺文書

4) 耶蘇会日本年報慶長1年9月18日附都発ルイス・フロイス書翰

5)、6) 堺鏡

7) 塩風呂由緒記

Summary

This is a study on the spaces as a Square in the mediaeval settlements which have interesting grounds for the existence of the Squares.

The typical five Settlements such as Ikeda-sho, Hieda, Kaizuka, Imabori and Sakai are studied.

In each settlement, the socio-economic or the spatial reasons why the Squares exist and the process of the formation and the development of the Squares are studied. (45. 2. 27受付)